



かん祢ふ川
菓北編
柳庄逸善



加ん祿ふ川



柳君也善

津よりと書かざるをん志より多神の信友
形にといふものみさ記多てしを今やそ耐えの恩人
さうしおふまの時国のあは友人をたふす平寒燈
の風然つよの厚石の残月が抱えさか如しきたに
枕上此ふら即記され多し志をさる者一衣衣
ありあふ此形教の少ちなると玉もとあねあちち
形が跡のほ記以ら記す梅在は以ち面の人と記
供家守南守と善夫守阿弥地備と同記る唱
一守守

武江の果地哀泣書

志ある武士は志ある篤実温厚のさしこむ
あつと申曲川七五三にあつた風流の清哥寺に
の長もあるとあつた梅屋とあつた海
代と善光寺は目代して四門は天明蘭徳の
彰端成してらるる杜林はさるる兼るる
袴はさるる花改興一と軒はさるる
も春秋のさるるさるるさるるさるるさ
るるさるるさるる文化の事さるる戒極は香
芳の事さるるさるる地下は文即とさるる
千日文の国は信成事さるる所はさるる年

雪の初に松の影を

心雨

文を志す中といふ因

小井の初



志す中疎をきりて

初調

松を志す中といふ因

季春

柳を志す別荘をきりて

東子

年々引松の影を

斗月

一清小飲をきりて

古の風をきりて

あしききりて

冬に松の影を

陽柳

あしききりて

遊市

時をきりて

豆尾

甲斐の松をきりて

言毎に涙をきりて

國村

世をきりて

有圭

以上松の影を

百の松の影を



山柳をきりて

柳影

こころに花を服せしむ
あまのうら一分指しおのれ
拾遺集のうら白雲の
梅ささむらひの白雲の
香雪のうらむ月は
雪山は及ぶと紙言ふ
春はうらむ人命なる
海はうらむ神なる
猿のうらむ入るる

北村巴雨山月猿
放筆

法雲のうらむおのれ

茶のうらむおのれ
酒のうらむおのれ
は白のうらむおのれ
春のうらむおのれ

銀のうらむおのれ

月夜のうらむおのれ
念仏
集北

文化八年霜月二日
秋香菴社友回向

東都

廣井秀藏藏板

一墓碑戒名

文林院閑錫柳在指士

二墓碑側面

文林院性今并講成章字叔達解

柳在指士別解也今成院之甲字子以堂一
以之幸末一可二言款書交年六十有一

文化八年霜月二日以新終矣



